

教育学部

教育改革・群馬プロジェクト 第1部会ー小学校における体育授業プログラムの開発ー

担当学科等 保健体育講座

担当者 齋藤 周教育学部長・鬼澤 陽子准教授

◎事業概要

平成16年度から「体育指導が得意でない先生のもとでも、子どもたちが運動を好きになる」ことをコンセプトに「体育授業プログラムの開発」に取り組んできた。

第1弾：ボールゲーム領域「ゴール型」(平成16-18年度：プログラム作成、19-20年度：普及)

第2弾：陸上運動領域(平成20-21年度：プログラム作成、22年度：普及)

第3弾：ボールゲーム領域「ネット型」「ベースボール型」(平成23-24年度：プログラム作成、25年度以降：普及)

そこで、本年度は、(1)体育授業プログラムの普及活動を行うとともに、(2)体育授業プログラムの有効性について、特に子どもによる学習成果(主観的評価・ゲームパフォーマンス評価)の変容から検討することにした。

◎実施事業等

1)本プログラムを活用した授業研究会:平成28年11月17日に東毛地区授業研究会として館林市立第七小学校6年生の「ティーボール」の授業プログラムを活用した授業公開を行った(参加者55名)。授業参観者による授業評価(観察者チェックリスト)を行った結果、5点満点中4点と高い評価であった。

2)本プログラムを活用した実技研修会:平成28年8月22日に館林市立第七小学校の全教員を対象に体育授業プログラムに関する研修を行った。①体育授業プログラムの内容・活用方法について解説するとともに、②それらを反映させた本プログラムの内容について実技を通して体験してもらった。

3)「体育授業プログラム」の有効性の検討:小学校高学年の「ティーボール」授業を展開することによって、①子どもから高く評価された。②守備における各ポジションの状況判断の適切さをみると単元前に比べて単元後に向上した。これらにより、本授業プログラムは子どもたちに肯定的に受け入れられ、高い学習成果が得られた。

◎期待される成果

1)本プログラムを活用した授業研究会を行うことによって参加者にプログラムの理解を深めてもらうと同時に、これから求められる「よい体育授業」のイメージを共有できたことは大きな意味がある。これをきっかけに、各学校・各自の授業実践を振り返り、よりよい体育の授業づくりが期待できる。

2)本プログラムを活用した実技研修会を実施したことで、上記1)の授業者が体育授業プログラムを理解するだけでなく、他の教員にもプログラムの内容を体験してもらうことで理解を深められた。さらに「ティーボール」の学習内容の系統性について共通認識ができた。

3)「体育授業プログラム」の有効性を確認できたことは、多くの体育授業に取り入れる上での根拠となり、これから普及活動をする上での貴重なデータとなった。